

2004.10 SBS 府中合宿 辻信一さん講演 「否定形から肯定形の経済へ スロービジネスという快樂」

<スロービジネスって変な言葉>

僕とコーチーの中村隆市さんが雑談風にやったほうがいいのかもしいないなとも思ったんだけど、どうでしょうかね。(笑)

皆さん、おはようございます。非常に感慨深いですね。僕がナマケモノ倶楽部なんかつくったりしたときからいつも中村さんと冗談みたいに言っていることが、形になっていくんですね。スロービジネスっていうのも最初は冗談かなあとってたんだけど。(笑)



せっかく皆さんがスロービジネスっていうことでここに集っていらっしゃるのに、こう言われるとちょっと気落ちするかもしれないですけど、ほんとうにスロービジネスって言葉自体が半分は冗談なんですね。(笑) わかっていますか(笑)。だってビジネスっていうのは、「ビジネス」でしょう？ 忙いってということですね。だから、速さを競う、忙しさを競うってことです。ですから、その観点からすれば、スローなビジネスっていうのは矛盾語法なんですね。言語矛盾なんです。だから僕は英語圏の人にあんまり言わないんです。「スロービジネス」なんていうと、ほんとうに呆れられますね。何言ってるの？って。

そういう呆れられるようなことを、わざわざ言ってみたいというのが元々の発想なんです。僕はこのことはとっても大事だなと思います。イタリアでどこか南のあたりで、北のほうの何か田舎の町の、昔左翼でちょっと欲求不満のオヤジさんたちが、いつもカフェに集って世界のことなんか話しているわけでしょう。で、そのときに「スローフード」なんて誰かが言ったんで、「おお、おもしろい、おもしろい」なんて。それが結局今では全世界に10万なんていうような会員を持つような大きな運動に今、なっているわけです。あれも半分は冗談ですね。「ファストフード」、で、スローフード。

「スローフード」って島村菜津さんに聞いたら、イタリア人は何かうまく発音できないそうですね。なんか「ズローフード」ってなっちゃう(笑)。明らかに英語のしゃべられないような人たちが英語を使って始めた運動なんです。そこにはいろんな皮肉が込められています。アメリカ的な、アメリカ中心の社会に対する皮肉が込められています。でも一方では、自分に対するちょっと情けない自分を笑う。「スローフード、マクドナルドがどうのこうのと言うけど、結局自分達の子供達や孫達はみんなそっちへ行っちゃっているじゃないか。そんなにすばらしい食がイタリアにあるならば、何で子供達はそっちに行ってしまうの？」。そういう情けなさとか。でもどっかで、「いや、結局は負けないよ。イタリアの食事にかなうものはないんだ」という誇りとかね。そういういろんな気持ちで、そのスローフードって言葉に込められていたんだと思います。

だからこそ僕達が「スローフード」って言葉を聞いたときに、非常に響き合うものを感じました。もう最初にスローフードの話聞いたとき、これは僕はオーストラリア人から聞いたんですけども、ナマケモノ倶楽部を始めた直後だったんですよ。中村さんも覚えているかな。ものすごく感激したね。もう何かやっぱり、地球の遠い

ところに同じこと考えてる人がいるんだって、ぴったり波長が重なりました。

スローフードがそうであるように、スロービジネスって言葉も同じような言葉だと思います。そこには僕達の、おそらくいろんな複雑な心のひだみみたいなものが、ちゃんと畳み込んである。おそらくそれが僕らの力、これからの我々の力になっていくんだろうなと思うんです。

< 依存させられる私たち >

これは、中村さんと「スロービジネス」というこれから出る本の中で、かなり話をしていることなんですけども、専門化という問題があります。専門っていうのがありますね。専門化する。専門化している人は専門家という



人たちですけども。現代の専門、プロフェッショナルリズムですよ、プロフェッショナルと言われる人たちがいます。実は僕もその端くれなんです。特に代表的な専門家というのは、医者とか弁護士ですね。それから教員、主

に大学の教員ですね。それから、テクノクラウトと呼ばれる非常に高度なハイテクを初めとした技術を扱う人たちが、そういうような人たちが専門家ということですけども、この人たちが、元来人間がしてきた仕事っていうのを、いわばそのところから奪い取って自分たちのところに独占していくわけですね。これを専門化というふうにイバン・イリイチという人が呼んだわけです。世界を専門化していくわけです。そのとき何が起るかというと、それは奪われた人たちが仕事を奪われて無力化していくわけですね。今までついていたものがつくれなくなるということが起こっていくわけですね。そして無力化すればどうなるかというと、依存していくわけですね。依存化していくわけですね。

実はこういうことを何で深津さんの話を聞きながら考

えていたかということなんですけども、僕達は実は専門化、無力化、依存化というのは生まれたときから始まるんだなということを改めて思い起こしていたわけです。僕達は子供達を無力化していくわけですね。そして依存させていくわけですね。一見、子供達の自立だとか子供達の教育とか言うわけだけども、それは無力化して依存化させていく。あるいは依存する側に立たないで何とか専門家になることによって、多数の依存する人達をばんばん支配していく側に何とか立てていきたいというような、基本的に今の教育のシステムということなんだろうと。

……

ですから、スローという言葉あるいはスロービジネスという言葉は、まさにそういう無力感に注目して、そしてその根っこにある僕達を無力化していったもの、つまり我々が本来持っているものをつくりだす能力とか、人とつながる能力とか、自然と対話する能力とか、そういうものをもう1回僕らに取り戻していくためのツールになったり、そのための道筋をつけたり、そのための知恵を授けたり、そのための道具を生み出していく。だから、その点でやっぱりスロービジネスっていうのは非常に大きな役割を果たすことができるんじゃないかなと思いました。

深津さんの話の中にもちょっとした道具がたくさん出てきましたよね。さっきの表で言うとあれだけいろんな道具が考えられているわけですね。これも、要するに大人の場合にはどうなるんだろう。子供達にああいうような道具があるわけですけど、じゃあ大人達はどうかっていうと、これがまた道具が我々の身近からどんどん姿を消しているっていう現実気がつくわけですね。何かものはすごくあふれていますよね、僕らの周りに。一見、たくさんあるように思うんだけど、実は道具と呼べるものはどんどん貧しくなっている。その代わりに何が多くなっているかというと、機械ですよ。人間と機械との関係。そして人間と機械との関係っていうのは、人間と道具との関係とは明らかに違うわけですね。

例えば考えてみてください、コンピューター、これは機械ですね。もちろんそれは道具という一面を持っているんですよ。持っているんだけど、でもそこに何かが起こると僕達はもうどうしようもないわけです。すごい無力感が僕らを襲うわけですね。「ああ、壊れちゃった。これを直してもらうのに時間がかかるし、お金もかかるなあ」。そのときに僕らは絶望をするわけです。もう何か、今までの僕達が築いてきた人間関係がもう全部無に帰ってしまったようなね。僕らは、それだけコンピューターというものに依存して生きているわけです。

いろんな機械って全部そうですね。その大元のところに電気というのがあって、2000年問題っていうのがあったのを覚えているでしょう？ あれは今考えたらすごくワクワクするもので、(笑)毎年1回ぐらいね、正月のたびにあのぐらいの何かワクワク感があるといいなあと思うんですけども。(笑)みんなもどうですか？ 結構楽しかったんじゃないですか？ 僕のところは車への依存を断とうっていうので車はもう持たないことになっている。でも建売ですからちゃんとガレージがあるんですね。ガレージの中にいろんなものを買い込みまして、水をいっぱい、そのころ僕のところには雨水タンクがなかったんで水を買って、炭を買って、結構何か長い旅に出かけるような感じで(笑)、それから最後に一番大きな問題といたらトイレの問題で、トイレをどうしようかって。で、僕はそのときに決意して、「よし、いざとなったらどんなに狭い庭でも、俺トイレつくるぞ」って決意したんですね。そのときにやっぱり僕は輝いていたと思うんです。(笑)つまり、トイレを自分でつくるといふ決意をしたときの男(笑)っていうのは、なかなかすごいものなんですね。

そのときにそしているんな役割が戻ってくるわけですよ。お父さんがたくましくなってくる。大工道具なんかどこにあったっけなんて確認して、そして足りないものはちょっと買っておいたりする。考えてみるとかつてお父さんっていうのは、道具を持っていましたよね。お母さんにも道具っていうのがありました。そして、「これは

お父さんの道具だから手を触れちゃだめだよ」なんて言われてたんです。そしたら何かちょっと神聖なものがあるかのようにね、子供達っていうのは一種の敬意、畏敬の念を持ってたんです。お父さんのノコギリを使っちゃいけない。ノコギリを使うんならこっちのを使いなさいとか、そういうことがあったんです。

そういうことっていうのは、やっぱりたまには思い出してみたほうがいい。なぜならば、それほど僕達は依存しているわけです。僕達は無力感、無力の海の中に、いわばこう生きているわけですね。「スロービジネス」っていう本の中にも書きましたけれども、僕達の家っていうのは、いまや物を入れるガレージと化している。僕達もまた物とどういふふうに、この箱の中に収容される物になってしまっているわけですね。当然、そこに住む人達が家に対する愛着というのもあまりありません。なぜならば、それは専門家の人達がつくったものだからです。例えばドアのノブが壊れた。昔の人だったら直したんでしょうけれども、「おい、電話しろ、電話しろ」とか、昔だったらイエローページか何かで、今だったらコンピューターか何かですぐに専門家をお願いをする以外に、もう何もできなくなっているわけです。ドアの取っ手ひとつ動かすことができない。

実は経済のシステムそのものが我々を依存化し、無力化し、そして専門化社会をどんどんどんどん進行させるというシステム。そのことによって経済が成り立っていくという、そういう時代に僕達は生きているということだと思います。

<パクセ・エコノミカ>

もう一つ、イリイチの言葉なんですけども、こういう言葉があります。イリイチの言葉は一見ちょっと難しそうなんですけども、よく考えてみると非常にわかりやすい。「パクセ・エコノミカ」。パクセっていうのはピースなんかの語源に当たる、平和の語源に当たるもので元々は「パクス・ロマーナ」というローマの、まあローマ時代の言葉なんです。そしてそれは、ローマを支配するローマ

圏、要するにローマの支配圏、支配下の平和という意味です。ローマの支配下の平和に対して、「パクセ・エコノミカ」はエコノミーの支配下の平和ということです。

僕達が生きている今の時代というのは、まさに「パクセ・エコノミカ」です。そして、平和という言葉、憲法9条ですね。平和という言葉はもうエコノミーとの関係でしか語れない。そういう時代が来たわけです。だから、それを敏感に感じとった自民党や民主党の多くの議員達はそのことを言っているわけです。「古い平和なんて言葉はもう通用しないじゃないか。経済の支配の下に我々は生きているんだから、経済の支配の下の平和ということを考えなくちゃいけない。だから憲法9条ももう合わない」ということですね。非常に筋が通っているわけです。じゃあそれがおかしいと僕らは思うんだったら、「パクセ・エコノミカ」ではない平和のことを、考えるしかないわけですね。後ろ向きだなんて言われながら、やはりそのことを考えるしかない。

僕達もまた、さまざまな分野でスロービジネスということを考えるということは、まさに同じことだと思います。平和だとか愛だとか、僕達が大事だと思っていることを経済との関係において、あるいは経済の枠の中で考えることを私達は許否したい。その外側に平和だとか愛だとかいうことを私達は考えていきたいんだ。つくっていききたいんだ。まあ、スロービジネスっていうのはそんなことっていうふうにも説明できるんじゃないかなと思います。

< 恐怖が利用されている >

それで「パクセ・エコノミカ」っていうのは、1つは恐怖に基づいています。もう1つはですね、否定なんです。否定形。我々が生きている社会のシステムっていうのは、いわば恐怖っていうのを何よりも重要な資源に動いているわけです。マイケル・ムーア監督の映画、皆さんご覧になっていると思いますけども、2つ、大ヒットがありますけど、最初の「ボーリング・フォー・コロンバイン」、あの「ボーリング・フォー・コロンバイン」っていうの

は、何についての映画かって、いろんな、あれはアメリカの恐ろしさについての映画だなんて言われてますけど、そうではないと思うんですね。あのテーマは恐怖ってことなんです。恐怖。実はこれは2番目の映画にも通じることなんですけども、必ずしもブッシュを叩くとかですね、アメリカがひどい、狂った国だとかそういうことをあれは言おうとしているんじゃないと思うんですね。もっと何かそこに深い問題があるような気がします。

「アメリカは銃社会だ、ひどいな」って言うけども、銃に象徴されているものっていうのは、実は我々の社会の中に銃という形ではないけれども満ち満ちているんじゃないか。それは恐怖です。やはり今の世の中を見て、やっぱり売れているものとかね、ビジネスがどこに栄えているかという、恐怖をうまく作り出せたところに栄えているわけですね。一番いい例は、新聞なんかの広告だとか雑誌の広告なんかを見ると、何かほとんどと言っていいほど健康についての、あるいは病気だとか健康とか体についての、それに美容とかですね、の広告じゃないですか。それはそれはすごい産業なわけなんですけども、あれなんていうのはもう基本的には恐怖ですよ。あと一番栄えている産業ってやっぱり保険でしょう。保険とか銀行とか。保険っていうのもまさに恐怖、ある種の恐怖っていうのが元になっている。あれを発明した人は天才ですね。保険を発明して、お金を発明した人も天才ですけども、保険っていうのはすごいでしょう。だって。だって、一番いい、手っ取り早いビジネスですよ。

どうしても僕達っていうのは怠け者なんでしょうね、根がね。放っておくとあんまり何もしないので、これでは商売がうまくいかない、ビジネスがうまくいかないっていうんで、僕達を突き動かすために多分恐怖ってことが動員される。今ある自分では駄目なんだということ、そういう力を後ろから加えてあげるわけですよ。例えば考えてみてください。ファッション業界にしても、化粧品業界にしてもそうでしょう。要するに今の自分が十分ではないというところに根ざしているわけです。もちろん、

ファッション業界でも化粧品業界でも必ずモデルっていうのがいて、そのモデルに向かっていろいろ自分を「この秋はこの点を修正しよう」、これは基本的に商売のやり方なんです。ちょっとこう、あごがほっそりとしたモデルがぱっと採用されると、ここんところを何とかこうちょっと削っていきっていくか、細くしていく、それを目指していく。それは基本的に今の自分ではない自分になっていこうというわけですから、自分をまず否定するというモーメントっていうんでしょうか、契機がないとそういうことは成り立ちません。すべて我々を取り囲んでいるもの達っていうのは、いわばそういうふうにして、既に自分が持っているものは不十分なんです。

< 自己満足がダートワードに >

僕はこれを、ずっと気に入って使っている水筒なんですけども、やっぱりスロークハイから新しい素敵な水筒が出るって言われれば、そっちを持ちたいなっていうふうにして、だんだん今ある自分を乗り越えていく。そして、その自分を乗り越えていくっていうことがすばらしいことなんだっていうことを、とにかく事あるごとに宣伝していく。そういうモードですよ、僕たちっていうのは、そして、いつのまにか自己満足という言葉は、ダートワード、つまり悪い言葉になってしまったわけです。否定的にしかもう使われません、自己満足。自己満足を今でも肯定的に使っている人、いますか？ いないでしょう。そんなの自己満身に過ぎないじゃないっていうわけです。そういう、子供達が満足していても、自己満身に過ぎないじゃない。自己満身に過ぎないって、じゃあそれ以上に一体何があるのかなって思うんだけど、とにかくそういうモードに僕達は入り込んでいます。

自己満がなければ、人の満足もないでしょうね。それなのに、自己満が否定形にしか使われない。そういう世の中に暮らしていくっていうことは、とてもつらいことです。それはなぜかという、今、ここにいる自分が基本的には許されてないってことです。

< 否定形から肯定形の経済へ >

さて、簡単に結論から言ってしまうと、こういう否定形の経済を僕達は肯定形の経済に転換していかなければいけないということだと思います。僕が活動しているエクアドルで出会った地域通貨、エクアドルの地域通貨をつくったマウリッシオ・フィルドっていう哲学者、思想家がいるんですが、マウリッシオがつくった面白い言葉遊びがありまして、スペイン語で経済っていうのを「エコノミア」って言うんですね。「エコノミー」っていうことです。それに対して彼はですね、これからはエコノミアをやめて、エコシニアをつくっていこう。そのためのツールが、彼の場合は地域通貨、シントラルっていうんですけども、シントラルという地域通貨だったわけです。これも偶然ではないですね。……

とにかく、「エコシニア」の「シ」。ここなんです。「エコノミア」っていうのは、これはちゃんと「ノー」っていう言葉がこの中に入っている。スペイン語で「ノー」、「いいえ」ですね、英語と同じ。スペイン語の「イエス」っていうのは「シ」です。「エコシニア」。「否定の経済から肯定の経済に転換しようよ。これからはエコシニアの時代なんだ」と言っています。

「エコシニア」の「シ」。肯定形を我が物にするためには、大きな問題が僕達の前に立ちはだかるわけです。問題としか僕らには今感じられないことなんですけど、それは時間がかかるということです。否定より肯定のほうが時間がかかるんですね。今ここを肯定するっていうのは、すごく時間がかかることなんです。今ここを犠牲にして明日を、またその先をっていうふうにして前につんのめって生きていくっていうことは、永久に今ここはないわけですから、これは時間がかかりません。そうやって僕達は生きてきたわけです。みんな、前につんのめって。

前につんのめるって言えば、英語でも西洋語では「プロ」って言葉がありますよね、「プロ」。「プロ」って言葉がくつつく言葉がたくさんあるんです。現代のキーワードの中に、「プログレス」とか「プロジェクト」とか「プログ

ラム」とか「プロシード」とか、あれみんな「プロ」がくっついている。「プロ」というのは前へって言葉なんです。「前へ」。

そういうふうに考えてみると、僕達っていうのは1つの巨大な物語、いつ始まったのか、もしかしたらもう大昔、2000年ぐらい昔かもしれない。一番はっきりしているのは近代っていうのが1つありますし、もっとはっきりしているのは産業革命っていうのがあるかもしれないし、日本の場合なんかだと、やっぱり西洋化とか戦後とか。そういう大きな物語。僕達の言葉、僕達の言語生活の中にインプットされているような、前のめりの文明の中に僕達はどうか生きてるようだ。

その前のめりになればなるほど、僕達は今ここを生きるっていうことができなくなる。今ここを抱きしめる、僕は英語で「エンブレイス」って言葉が好きなんです。英語で「エンブレイス」、これは人間に限らずですよ、何でも抱きかかえる、ありのままとにかく受け入れるという態度、人間の態度というんですけども、今ここに居る自分、今ここに居る他人、今ここに居る物たちっていうのをエンブレイスすることができなくなる。エンブレイスするには、時間がかかるわけです。これは僕は人間だけではないと思います。

人間との間で人間と付き合うっていうのはすごく時間がかかるわけですよ。その人と向き合って、その人の考えている話に耳を傾けて、それに対して自分が考えることを言って、自分の思いも相手に伝えて、それに対するコメントもまたもらって。面倒くさいですよ、これ。ものすごく時間がかかる。でも、人間が生まれて以来、こうやって言語を発達させて、こんな複雑な言語なんていうものをつくり出した動物はほかにいないわけですから、考えてみればこういう面倒くさいことをやるように僕達は進化してきたわけだし、そういうように生まれてきているわけですよ。しかしそのことが、もうネガティブにしか考えられない。面倒くさい、時間がかかる。

……

そんなふうに肯定的であるということはすごく時間が

かかることなんだ。向き合うこと、待つこと、見守ること、そういうエネルギーをもう1回僕達が取り返さないと、もう我々自身がもたない、そして地球がもたない、自然がもたない、子供がもたない、すべてが持たないぎりぎりのところに、今来ているのではないかなと思います。

<スローな快樂>

さて、そういうのを僕はネガティブに問題があると言いつつ方をしましたよね。そうとしか僕らにはまず考えられないわけです、最初。「時間がかかる、困ったなあ、これは問題だ」、どうやって時間をつくり出すかとかっていうふうに発想するわけだけど、でもこれは同じことを裏側から見たら、すごいことなんです。どういうふうにするか、すごいかっていうと、それは楽しいですね、まず。そして美しいわけです。そして安らぐ、そして美味しい。僕は快樂っていう言葉を使っています。快樂がそこにあるわけですよ。ちょっと面倒くさいけど快樂があるわけですよ。

僕はもう、もともと快樂主義的なんです。快樂主義。あんまりつらく苦しいことっていうのはあんまり駄目なんですよ。あんまり禁欲的に仕事をするとか、努力型でもないですよ、そんなところから発想してはいるんですけど、僕はこう言いたいと思います。人間っていうのは何のために生まれてきたのかなっていうと、皆さんの意見はこれぜひ聞きたいところなんですけど、僕はやっぱり楽しく、美しく、安らかに、美味しく生きるためだと、そのために生まれてきた。そして、ほかの人々も多分そうなんじゃないのかなっていうのも思っているわけです。そういうふうに言うんですよ、「そりゃあ快樂って、それはいろいろあるじゃないか、何もゆっくり歩くことだけが快樂じゃないだろう」なんて、自分は自動車で高速道路を突っ走るのが快樂だって言う人がいるんですよ。僕はそれはそうだと思います。つながりを絶つっていう快樂もあるんですよ。それは僕達がやっぱり生まれ育つ中で身につけてきた快樂の1つだと思うんです。確かにあるじゃないですか、ずっと人といるときにね、ちょっとつながりを絶って1人になって、一人旅に出るに出

るなんて、そういう快樂もありますよね。しかし、そんな
いろんな快樂を持ちながらも、僕達人間ってというのは、
本質的につながる動物なんだというふうに思うわけ
です。だから、つながるためには時間がかかりますから、
スローなんですよ。だから、「スロー」っていう言葉が
出てきたわけですけども、ちょっと考えてみてください。

きのうちょっと言いましたよね、アリストテレスっていう
哲学者が、人間は社会的動物だって言った。それは、
ほかの動物とやっぱりちょっと違うわけです。ほかの動
物にも社会と言われるようなものはあるんですよ。社会
と読んでいいんじゃないかな、例えばゴリラの世界って
いうのは一種の社会を、やはりゴリラ的世界を形成し
ているとも言えるわけです。しかし、明らかに我々の社
会っていうのは違う。それは明らかです。まず言語な
んていうさっきも言ったこういう複雑なものも介してつ
くられる社会だっていうことも違いますし、もっとこう非常
に綿密で……。

< 足りないのは愛！？ >

さっき深津さんの話を聞きながら思い出していたのは、
かつてルーマニアの政権が、これ本に書いてますけど
も、崩壊する直前に子供達を、政権として子供をどうや
って育てるかっていうのは大問題だったんですね。今
日本の政府は少子化っていうことで非常に悩んでます
けども、そのころのルーマニアの独裁者達はどうやって
子供達を効率的に育てるか、1人1人の上に2人の親
がつかなくて、すごく非効率なわけでしょう。子供それ
ぞれにペースがあって、もう面倒くさいですよ。さっき
のあれみたいな、あんなふうに子供を育てたらどうな
るんだ、非効率だし生産的じゃない。あんなことをやっ
て親が見守っている暇があったら、その親は工場にで
も行って仕事してほしいわけですよ。そして同時に、
じゃあ子供は要らないかってなったら、そんなことはな
いんだ、子供をどんどんどんどんつくって経済を支えて
いかなきゃいけないっていう。じゃあ、子供をたくさんつ
くる、しかし親の手がかからない。効率的になるべく早く

育てるにはどうしたらいいかっていうので、収容所制度
ができたわけです。子供をみんな収容して一挙に育て
る。まあ、今の農業とかあのやり方と同じですよ。工
業のようなやり方と同じですけども、そしたらその政権
の最後の方に子供達がばたばた死んでいったんです。
研究によると最後の数年間っていうのは、毎年全収容
者の3分の1ずつ死んでいったっていうんですね。3分
の1、1000人いたところでは300人とか、330人とか
が死んでいくわけです。少なくなってまたその3分の1
が次の年に死んでいく。それが何なのかっていうことを、
これはかなり科学的にしっかりとした研究を、プロジェ
クトチームが今政権崩壊後やるんですね。結論ってい
うのが、非常に何かあっさりとした単純な答えで、愛が
なかったから。だって、凍え死んだわけでもないし、飢
え死にしたわけでもない。一応の服があって、一応の
温度が保たれて、一応の食べ物があって、しかしちょっ
と風邪を引いた子供はパタッとそのまま死んじゃうわけ
です。それは愛がなかった。「ああ、そうか、やっぱり人
間っていうのは愛がないと死んじゃうんだ」ということが
科学的にわかってきたわけです。

これがですね、実は僕達がそれはチャウシェスクの
特殊な状況ではあるんだけども、基本的には同じこと
が今、起こりつつある。我々の社会全体にこれと同じこ
とが今起こりつつあるのではないのかな。人間は社会
的動物っていうのは、そういうことだと思っんです。人間
は愛がなければ生きていけない。簡単に言えば、ビー
トルズなんか言っていたああいうことです。そのこと
が、今我々の目の前に結構切羽詰った形で突きつけら
れているのだと思います。

さて、とすればですね、人間がつながる動物である、
人間は社会的動物だっていうことは、人間は愛する動
物だ、そしてつながる動物だということですね。そして、
人間がつながるのには時間がかかるわけです。これまで
は我々の経済っていうのは前のめりだった。と同時に、
もっともっとなんです。1つの物を持った途端に、こ
れを否定してその次を想定しなきゃいけない。これが経

済だしビジネスだっていう発想しかなかったわけです。だから合言葉は「モア・アンド・モア」です。そしてモアっていうのは必ずモアにつながる。つまり「モア・イズ・モア」だと思っていたわけです。どういうことかっていうと、物がモア、たくさん生み出されていってれば、我々の幸せもモアになる。「モア・イズ・モア」という等式を僕は信じていたわけです。そして、僕はもう今はっきりわかるわけですね。モアは決してモアではなかったということがわかった。

……

そして、僕達が犠牲にしてきたもの、物だけではありません。人と人とのつながりも同じことです。人と人とのつながりも、もうどんどん希薄になって、自分にとって一番重要な人とすら、なかなかもう顔が合わせられない。一緒にご飯も食べられない。やっとのことで食卓と一緒に座ったと思ったら、みんなテレビを見ている。テレビ見ない人は携帯をやっている。一体どうしちゃったんでしょうか。つまり、これまでの経済っていうのは、否定形の経済だって言いましたけど、同時に反つながり、反社会的な経済なんです。

<つながること、その快樂>

ところで、僕は快樂主義者として思うんですけども、人間の快樂の一番豊かな泉っていうのは、つながりだと思えます。つながりを絶つ、つながりを切る快樂もあります。そういうのも認めます。全部認めますけど、それにしても僕達の快樂の大元、一番豊かな泉っていうのはつながりにある。つながることにある。人と人とのつながりであり、人と自然界との、人と動物とのつながり、人と物とのつながり、人と自然とのつながりを媒介する道具とのつながり、人と人とのつながりをつくるための道具もあります。そのつながり。だから道具が失せていく、人間関係が希薄になっていく、この「モア・アンド・モア」の社会っていうのは、実は「モア・イズ・レス」

の社会なんだ。レスっていうのは幸せですよ。物をモア、モア、お金をモア、モアと追いかける社会、この経済は実は「モア・イズ・レス」、レスってわかりますね、「よりすくない」、の社会だと。

それに対して僕達がこれから構想していかなきゃ、つくり出していかなきゃいけない物語っていうのは、「レス・イズ・モア」です。「レス・イズ・モア」。どんどん引き算していく。物をどんどんどんどんふやして行って、そして今ある自分、今のこの瞬間、この場所をどんどん否定して、自己を否定することをいわばエネルギーにして前へ突き進んでいくというような経済やビジネスを自己肯定の、そしてつながりの、そしてそのつながりをどんどんどんどん生み出すさまざまな道具だとか、そのためのツールだとか手段を豊かにつくり出していく。そういう経済やビジネスをつくり出していかなければいけない。それがスロービジネスということだと思います。その領域はほとんど無限に近い、膨大な領域だと思います。スローなビジネスっていうものの前途はものすごく明るい。そのことをきょうからの議論で皆さんがいるんな分野からですね、考えて行って、そしてそういう豊かな分野を耕して行ってほしいなと思います。

時間が来ましたので、最後に1つ、老子ですね、老子の言葉を……僕もちょっとしゃべり過ぎてますね。やっぱり「レス・イズ・モア」というメッセージが来てますので、この辺で終わりにしますけども、最後に老子の言葉ね、これは鹿島祥造さんという人が素敵な口語訳をしますんでそこから。

「たかの知れた自分だけど、社会だったかの知れた社会なんだ。社会の駒の1つである自分は、いつもあちこち突き飛ばされて前のめりに走っているけれど、そんな自分とは違う自分がいると知ってほしい」

ということで、皆さんがこの合宿を通じて違う自分を発見して下さることを祈っています。(拍手)